

上杉謙信の法体について

——高野山無量光院清胤とのかかわりから——

加 澤 昌 人

目 次

序 章	上杉家の御堂祭祀
第一章	天文の上洛と受戒
第二章	謙信の法体
第一節	受明灌頂を受く
第二節	法の如くの法体
第三節	阿闍梨法印謙信
むすび	

序 章 上杉家の御堂祭祀

米沢藩上杉家と仏教寺院とのかかわりをみるとき、他藩に例のない二つの特色がある。

一つは上杉家だけが真言宗寺院を菩提寺としているこ

とである。上杉謙信^①は法体して、法印権大僧都に任ぜられた。その嗣子景勝も真言宗に帰依すること深く、景勝以降の米沢藩歴代藩主もまた、死後、大覚寺門跡の執奏により法印権大僧都の追諡号を受けることとなり、大正八年（一九一九）の茂憲まで続いている。

もう一点は、居城の本丸内に藩祖謙信の遺骸を祀る廟堂（以下御堂という）を設け、その御堂に近侍する二十一の真言宗寺院を本丸と二之丸の一角に配していることである。その第一たる法音寺は正保二年（一六四五）に大覚寺の院室菩提心院を兼帯するという格式の高いものであった。

この御堂について、『上杉神社誌』^⑥は、

本丸東南の浄地をトとして靈廟を新営す。（中略）中央正面に靈柩を奉安し、右に善光寺如来尊、左に泥足毘沙門天王を安置す。而して其の守護の掟を定むること頗る嚴重なり。

牙城の濠外に真言十一ヶの能化寺坊を設け、坊中に九ヶの所化僧坊を置き、御堂衆と称し、又城内に靈仙寺を置きて、能化寺坊輪番を以て勤仕し、専ら祠堂の勤経護衛奠式を司らしめ、更に御膳衆と称する六名の所化を置きて、日夕供饌の調度に任せしむ。

（中略）三月七日より読経連々一週日、十三日の御命日には藩主親しく参拝の儀あり。（中略）藩主事故ある時は、城代の代参ある外、絶えて他人の礼拝

を許さず。家臣等も亦忌日に当りては皆謹慎静粛を極めたり。

という。それは高野山の大師廟を思わせるものであったといわれている。

この御堂の造営は、藩祖謙信を尊崇する嗣子上杉景勝とその臣直江兼統が大乗寺良海等をして、転封のたびに謙信の遺骸を越後から会津、米沢へと移して成さしめたものである。謙信崇拜はすなわち、毘沙門天王を奉じて不動明王の降魔の剣をとり、「輝虎守筋目不致非分事」と題する祈願文^⑦の中で、

輝虎一代改而不致非分事、惣別大小事共、従神慮外者頼不申候、輝虎不知非道不存候、

と言いつ切った謙信の信念を、藩主自らが身をもって実践することであった。そしてそれは、上杉家ひいては米沢藩を安定させうる精神的な一つの大きな柱となっていくのである。

さて、この謙信の「不知非道不存」と言った信念のよるところは、高野山無量光院の清胤について灌頂を授けられ、法の如く法体を遂げる過程の中で培われたもので

ある。

以下、謙信と清胤とのかかわりを、その書状を中心として追いつながら、謙信の法体の実態を明らかにしたい。

第一章 天文の上洛と受戒

謙信は七歳の天文五年（一五三六）に林泉寺の天室光育のもとで修業を始める。しかしこの年の秋には元服しているの、それは僧としての修業ではなく学問のためであったと考えられる。けれども、以降七年間におよぶ林泉寺の修業は、後に謙信を法体せしめる大きな原因となったことは否めない。

その後、天文十八年（一五四九）暮には兄の守護代長尾晴景の名跡を継ぎ、同十九年二月には守護の待遇を受け、さらに同二十一年四月には従五位下彈正少弼に叙任された。これに答謝し、あるいは信濃・関東への出兵の大義名分を得るために、同二十二年秋に上洛を果たすのである。

この上洛にあたり、大きな役割を果たしたと考えられるのが、天文二十二年夏に越後直江津の善導寺から京都

百万遍智恩寺に晋山した岌長である^④。また、大覚寺門跡義俊は謙信の叙任に尽力し、この上洛で面識を得た後はさらに親交を深め、朝廷や将軍家との仲介役として、あるいは謙信法体の過程で重要な役割を果たしている。

この上洛の際、謙信は大徳寺の徹岫宗九に参禅し、十一月十九日には高野山へ登山し、十二月八日には再び大徳寺に参禅して、宗九より在俗のまま三帰五戒と衣鉢法号を授けられた。宗九の授記文にいう^⑤。

越之後州平氏景虎公授衣鉢法号三帰五戒曰宗心

天文廿二癸丑臘八日

前大徳徹岫叟宗九（花押）

（朱印）（朱印）

この中で「三帰五戒を授け」とある。謙信は母の影響で毘沙門天を殊に深く信仰していたが、その『仏説毘沙門天王功德経』には、^⑥

欲得我福、持五戒三帰、為無上菩提、願求決定施与得成就一切

の一節がある。宗九より提唱された「無の字の公案」を解き三帰五戒を授けられた謙信が、兜に「無」の字を表

わし、本陣旗に「刀八毘沙門」の文字を記した所以をここにみるのである。また、この後、一時期謙信は「宗心」と署名することがしばしばあり、家臣も書状の中で「宗心」といつている。

また、従来は「高野山に清胤を訪ねる」説が一般的であるが、これも疑問が残る。この年、謙信二十四歳、清胤三十二歳である。清胤については無量光院の『先師過去簿』によって知るのみである。

無量光院院譜

(中略)

一、上杉輝虎公婦依清胤法印。創建精舎於越府号法マ懂寺令住請法印。

(中略)

前第二世檢校執行法印大和尚覺融
天文廿四乙卯年五月四日寂。世寿八十三

(中略)

前第三世檢校執行法印大和尚清胤
慶長五年十月十日入寂。世寿七十九

字舜学房。越後国人。覺融之神足而繼融師主当院。上杉謙信聞胤之道徳就而剃髪入道為師資之約。更建立一字精舎屈清胤為始祖。

第四世
前檢校執行法印大和尚玄仙
慶長十七年六月三日入寂

清胤の三十二歳という年齢は、ようやく入寺位に昇進し住職たりうる資格が得られた頃である。^①無量光院には当時、八十一歳の高齡ながら、大師の再誕と称された前官覺融があつた。覺融はこの年の翌々年に遷化するので、清胤が謙信の上洛の前後に無量光院の住職となつたことは確かであるが、決して高い地位にあつたわけではない。また、同じ越後の出身とはいえ、それ以前の交流を物語るものもない。謙信の高野山登山が清胤を訪ねるものであつたことを立証するものは何もない。しかし他に特定する人物もなく、ここでは「清胤を訪ねる」説に疑問をなげかけるとどめる。

けれども宗九からの授戒と清胤との出逢いが、後の謙信に多大な影響を与えたことは否めない事実である。果して、この三年後の弘治二年（一五五六）に謙信は突如として出家遁世の志を遂げるために越後を去ろうとしたが、^②越後の不安定な社会情勢はそれを容認することはない、^③武將に立ち返らざるを得なかつたのである。

第二章 謙信の法体

第一節 受明灌頂を受く

永祿二年（一五六二）、謙信は二度目の上洛を果たし、再び高野山に清胤を訪ね、さらに親交を深めたのであった。

この三年後の永祿五年七月二十五日、謙信は越後国分寺の五智如来堂を再興し、落慶供養の導師として清胤を招請した。時に謙信三十三歳、清胤四十一歳。清胤は阿闍梨に昇進していたと思われる。『上杉家御年譜』（以下『上杉年譜』とする）には、

同年秋七月廿五日、頸城郡国分寺五智如来堂供養アリ。政虎公往年ヨリ真言ノ密教ニ御帰依有テ、今年五仏ノ秘法御伝受也。当月中旬ヨリ国分寺ノ五智如来堂ヲ再興シ玉フ。兼テ神余隼人正親綱ヲ上洛セシメ、大覚寺義俊親王ヲ以テ執奏シ玉フ。供養ノ導師ハ高野山無量光院ノ住持清胤法印ヲ招請シ玉フ。とある。また『北越軍談』には、

護国山国分寺の五智如来堂を再興ましませし時、落慶供養の導師として、高野山金剛峰寺の学侶無量光院清胤を請待有て、府内の宝幢寺に寄宿の間、是を戒師として、胎金兩部の秘密の印明を受けて、灌頂投花を遂行

したとある。さらに『太祖一代軍記』では、永祿六年正月としているが、

高野山無量寿院清胤法印を戒師とし、真言金胎兩部の秘密印明を受け灌頂を遂げ

の記述がある。「五仏ノ秘法御伝受」とか「灌頂投花を遂行」「灌頂を遂げ」の記述は、謙信がこの時に受明灌頂を授けられたことを意味するものであると考えられる。

灌頂は三種類に大別される。一つは僧俗男女を問わず在家に解放された結縁灌頂である。これは単に投花得仏して因縁を結ぶもので、平城上皇や嵯峨天皇の入壇したものである。

次に受明灌頂である。これは得度して間もない弟子位にある僧が投花によって得られた一尊を対象とした印

契・明呪を伝授されるものである。これを受けて初めて密教を受持し学修する資格を得ることができる。また高梨宥興師によれば、^⑧「受明灌頂を受けるためには必ず剃髪しなければならず、この法式を厳格に執行すれば必ず

剃髪しなければならない」という。謙信が全くの法体となるのは天正二年（一五七四）のことであるが、受明灌頂を受けた際に一度は全くの法体となったと考えたい。だが、これ以後の謙信の頭型は、

公の頭形は円頂にあらず切余を被て猶有髪なり。山門の衆徒、根本の法師の如し。

というものであったと思われる。

得度式では法名も授けられるが、「謙信」の署名は元龜元年（一五七〇）十二月十三日の祈願文に初見される。^⑨この願文は紙全体が血で染められ、俗に「血染の願文」と呼ばれ、その内容からは、すさまじいまでの謙信の信仰心が窺われるのである。「謙信」の名の由来を林泉寺の益翁宗謙が提唱した「達磨不識の公案」を説破したので「不識庵謙信」というとするのが通説である。しかし「達磨不識の公案」を説破したのは宗謙が林泉寺に

晋山して間もない、謙信の天文の上洛以前のことといわれている。ゆえに、「謙信」の法名は宗謙が与えたものではなく、清胤がそれをもとに与えたものであると考えたい。

灌頂の三つ目は伝法灌頂であるが、これは第二節で述べることにする。

永祿五年（一五六三）以降、謙信は関東への出陣が多くなり、以後十一年間のうち六回関東で越年している。

この間、清胤との交流を示すものはない。次に現われるのは、元龜四年（一五七三）七月十六日の清胤の書状である。^⑩同月二十八日に改元されるので、以下天正元年とする。この年、謙信四十四歳、清胤五十二歳である。

依的便令啓上候。無量光院為迎御使僧登山候。則応増令可有下向之由、雖然於季冬学頭職昇進候。学衆中各抑留候。来年秋末必可被罷下旨相談候。此旨可然様可預御披露候。恐々謹言。

七月十六日 左学頭

進上 御奉行所

追啓 大乘寺儀御威光を以御普請等被仰付由、拙

僧不淺次第ニ存候。以上。

『越佐史料』はこの書狀を年未詳として、天正三年六月五日の項に付録として記している。ここで、これを天正元年とするのは、清胤の年齢と学頭昇進の關係、清胤が天正二年に越後下向を果すこと、謙信が天正年中に大乘寺を普請していることによるものである。

従来、大乘寺は信濃川中島にあったものを、その地に出陣した謙信が住職長海に帰依し、後に伽藍を春日山に移転したものとされてきた。しかし、平野団三氏によれば、現在の新潟県中頸城郡吉川町大字大乘寺には大乘寺屋敷があり大乘寺趾がある。そこには鎌倉時代のいけ込み式阿弥陀如来石仏が認められる。吉川町は平安時代は鳥羽十一面觀音堂領であり、真言宗大乘寺もそこに生まれた古寺であったとしている。

また、同所には、

元龜二年

法印賢永大和尚位

七月廿日

の銘の一石五輪塔がある。賢永は長海の法嗣であり、と

上杉謙信の法体について

もに謙信の在世中に遷化した。

大乘寺健氏所蔵の『当家代々御靈号』の巻物は、「一代長海命、二代賢永命、三代良海命」となっており、同じく『大乘寺家記』は、「わが大乘寺家は謙信逝去の時大導師を奉仕した良海を始祖とする」としている。

以上のことから、長海・賢永の時代には現在の吉川町にあった大乘寺が、天正元年の良海の時に春日山へ移転されたものであると考えられる。従って川中島の大乗寺が春日山に移されたのではなく、川中島の某寺より長海が頸城郡の大乗寺へ晋山したものである。

『大乘寺家記』は「春日山不識院大乘寺と称し」といい、『上杉年譜』は各所で「城内北ノ丸大乘寺」と記し、また謙信を「不識院内ニ葬埋シ」としている。春日山城本丸の北下方には、護摩堂・諏訪社・毘沙門堂・不識院と呼ばれる曲輪趾が並ぶ。前の記述からみて、大乘寺はこの曲輪に建てられた極めて小さな寺であったと思われる。なお、宝幢寺と同様に府内の国分寺付近に建てられたとする説もある。

第二節 法の如くの法体

謙信は天正二年（一五七四）三月十一日、関東の陣中より清胤に書を送り、無量光院と師檀の契約をなした。

定

越後国貴院旦那之事、師檀契約已厚矣。然則不啻予累葉、旗下將士及分国之檀契、亦可准同于予者也。

天正二年甲戌

三月十一日

謙信（花押）

無量光院法納

机下

その後、五月に帰国し、十月にはまた関東へ出陣、十一月下旬か十二月上旬に帰国する。そして十二月半ば、清胤が二回目の越後下向をする。清胤が謙信の建立した宝幢寺に住したのは前回同様である。この時、謙信四十五歳、清胤五十三歳である。

清胤を迎えた謙信は、清胤を師として剃髪する。『上杉年譜』には、

余正二年 同年冬十二月十九日、管領御剃髪、護摩灌頂執行有

テ、法印大和尚ニ任セラル。

とある。また謙信の「天正三年乙亥卯月廿四日」の祈願文にも「去年極月十九、令法体」とあり、謙信が天正二年十二月十九日に剃髪し全くの法体となったことは確かである。

清胤は謙信の法体を、その六ヶ月後の天正三年六月五日に高野山宝性院へ報じた。この書状を一字一句正確に読みとることによって、「護摩灌頂執行有テ、法印大和尚ニ任セラル」のが同じ十二月十九日ではないことが判明し、その他の従来の諸説も修正されるのである。この書状は現在、高野山無量光院に所蔵されている。その全文は次のとおりである。以下これを清胤書状という。

態令啓札候。仍太守謙信依年来之御宿望去年被成御法体。愚僧与師弟之御契約。四度・伝法之儀式如法被相遂。永宗門之制誠不可有違犯之旨御誓詞厳重候。此趣衆徒中江可被成御披露、以御内証使僧被差登、御直書并学（係）呂惣分江黄金百兩進獻。貴院江別而黄金拾兩被進之候。是又現世之非御名聞、高野靈地之為体先年御見聞之上、弥々殊勝被思食入之間、後世菩提善根可被成置、其山御懇志之故如此候。依之

別而一院有御再興、御菩提所被相定。惣者大破之伽藍之儀、連々修造可被仰付御臆意候。此等之趣、衆徒中被成御披露、被及御回報者可為御喜悅候。恐々謹言。

宝幢寺

(天正三年)
六月五日

清胤(花押)

宝性院

御同宿中

これを順を追って詳細に解釈したい。まず第一に「依年来之御宿望去年被成御法体」とある。さきの受明灌頂の際に一度は全くの法体となったとも考えられるが、その後はやはり『北越軍談』のように「猶有髪」であり、「山門の衆徒、根来の法師の如し」であつたと思われる。ここにおいてようやく長年の宿望がかない全くの法体となつたのである。

次に、「四度・伝法之儀式如法被相遂」が問題である。布施秀治が『上杉謙信伝』で、「師弟之御契約四度。伝法之儀式如法」と読み違えて「師弟の契、前後四回に及び」と記している^③。以後の多くの研究者がこれに

ならつて、真の謙信の法体の姿をとらえることができなかった。しかし「四度」「伝法」はそれぞれ「四度加行」と「伝法灌頂」のことである。

四度加行とは^④、伝法灌頂に入壇する前提として、十八道・金剛界・胎藏界・護摩の四種の修法(三密の行)を実習する修行である。修行中は、門外不出で齋戒沐浴し、中断した場合は最初からやり直さなければならぬ。また時代により日数は八百日、二百余日など変化があるが、次第に短縮されて現在では約百日が標準となっている。

また、伝法灌頂は^⑤、師僧から弟子に真言密教の秘法を伝授する最高の儀式であり、ゆえに伝法という。そして儀式の中に智慧の水を頂に灌ぐ作法があるので灌頂という。この伝法灌頂を受けた者が阿闍梨で権大僧都の僧階を得る。真言宗で最も厳肅な大掛かりな儀式であり、この法会の前にはその前行があり、終ると結願法要があり一週間を要する大法会であるという。さらに灌頂に際しては、師から弟子に印契と印信(真言の秘法を、^⑥記したもの)、血脈(師資相承の由)が授けられる。血脈は密教の秘法が正し

く伝授されたことを証明するもので、これがなければ秘法を修しても効驗はないとされている。

謙信はこの四度加行と伝法灌頂を法の如くに遂行したという。四度加行を略式として百日程度で終え、伝法灌頂に約一週間として、その日数は百十日ほどになる。また、謙信が剃髪した天正二年十二月十九日から北条氏討滅の願文を納めた天正三年四月二十四日までの日数もほぼこれに等しい。謙信は清胤より伝授された血脈をもつて、天正三年四月二十四日に北条氏の調伏を願い秘法を修したのであらう。

第三に莫大な黄金の献上は、「現世之非御名聞」「後世菩提善根可被成置、其山御懇志之故」であるという。密教において師は絶対である。その師清胤が謙信に「永宗門之制誠不可有違犯之旨」の誓詞を取りながらも言っているこの言葉は、ただひたすらな謙信の信仰心を伝えているものである。

第三節 阿闍梨法印謙信

前節の清胤書状は宝性院宛であるが、宝性院からの返

書は現存しない。清胤や謙信はそれ以外へも書状を送ったと思われ、その返書として次の三通がある。まず第一は無量寿院快慶からのものである。^⑤以下快慶書状という。

依年来之御願被成発心、殊密家所帰之旨賢慮誠不及
 悉知処、更難尽紙上候。就其為被開聖主之恩化、黄
 金十兩到来。御懇情令承悦候。自是祝詞之一儀具、
 両使節江申渡候事候。恐々頓主。

(天正三年)
 七月廿一日

快慶(花押)

謙信法印御房

御報

文中の「密家所帰之旨賢慮」は謙信が法に従って法体を遂げたことを指し、「悉知」は他の戦国大名の形ばかりの入道姿を指しているものといえる。

二通目は無量光院の留守僧有義のものである。^⑥以下有義書状という。

御状令拜見候。抑、謙信法印御房入真言宗門、御修行如法之趣希代勝事、併一家繁栄之嘉瑞不可過之候。満寺開喜悦之肩候。将亦無量光院可被成御願之

寺之旨、依被仰出候、御納得之段尤可然候。就其彼院家之留守居、愚僧罷渡候へ之由候。雖為斟酌千万、且者印融・覚融御遺跡相統之儀、悦則移住仕候。隨而院中為披露、御樽料黄金十兩被仰付候。各々拜受仕、忝之由申候。委曲御両使可演説候之間、不能一二候。恐々謹言。

無量光院

(天正三年)
七月廿八日

有義(花押)

宝幢寺

御返報

これは「無量光院有義」と署名しているが、第一章にあげた無量光院の『先師過去簿』にみるように、有義は世代に入っていない。有義は高野山正智院の住持であると思われる。当時「有義」を称する者は正智院有義のみである。

『正智院累葉先師名簿』には、

前左学頭有義深音房

天正十三年乙酉十二月九日子刻入寂。石州日和村人。春秋七十二。

有伝 教乘房

慶長五年辛丑七月十八日申刻入寂。但州人。春秋六十。

とある。有義は当時六十二歳であり、法嗣有伝は三十四歳で既に住職たる資格をもつものと考えられる。有義書状には「彼院家之留守居、愚僧罷渡候へ之由候(中略)悦則移住仕候」とある。したがって、有義は兼帯ではなく、正智院を辞して清胤不在の間の無量光院の寺務を専らとしたのである。またこのことは、清胤の越後滞在がかなり長期に及んでいることを意味している。

また清胤書状に「一院有御再興御菩提所被相定」とある。これのみをみれば、天正元年の大乗寺普請とも思われるが、有義書状の「無量光院可被成御願之寺」によって、謙信が菩提所と定め修理したのは無量光院であることが明らかである。

三通目は僧快宣のものである。以下快宣書状という。快宣は清浄心院の若き僧である。

尊書拝閱、抑、被遂御法体之素意、殊者言御受法之趣、誠以難有奉存候。就之当山学品行人方へ音問之

旨申届、則被及尊答候。随而愚僧へ黄金拾両拝領、快然無二候。然者為信喬禅月之如意羅漢之像、同孔雀明王令進上候。猶宝幢寺可為演說候。恐々謹言。

七月晦日

快宣

謹上 謙信法印御房

御報

ところで、清胤の謙信在世中の越後下向は三回とされてきた。第一回目が永祿五年（一五六二）の国分寺再興の時、第二回目が天正二年（一五七四）の謙信法体の時。そして第三回目は『上杉年譜』に「（天正四年正月）同月 高野山無量光院ノ住持清胤法印、越府ニ下着ス」とある。

しかし、『上杉年譜』は続けて「（秘密蔵は）出家受戒ノ身ニアラスンハ凡俗ニ授ル事アタハス。又是ヲ伝フヘカラス」または「清胤少モ屈セス、更ニ伝授ノ躰ナシ」という。これは既に伝法灌頂を授けられた謙信に対する記述ではなく、編者の誤りであると考えられる。さらに、快慶、宥義、快宣の書状をみるに、清胤の越後下向は二回ではなかったかと思われる。

その理由として、まず、清胤自らが兼帯寺院の「宝幢寺清胤」を称し、留守居の宥義が「無量光院有義」を名乗っていることである。これは清胤の越後滞在期間がかなり長期にわたっていることを示している。また、宥義書状は宝幢寺清胤に対して「御両使可有演說」とあり、快宣書状は謙信に対して「宝幢寺可為演說」と、兩者ともに「演說」としている。したがって、七月の末に発せられた三通の書状が越後へ届いたであろう八月中旬頃には、まだ清胤越後に滞在していることを示すものである。清胤が天正三年八月下旬以降に高野山へ帰山し、天正四年正月にまた下向という、短期間の往来があったであらうか。

さらに、謙信は天正二年十二月上旬に関東より帰国して以来、天正四年三月中旬の越中出陣までの一年三ヶ月もの間、自ら出陣することがなかった。この時期、武田信玄が世を去り、足利義昭が織田信長によって追放されて、天下は信長を中心にして刻々と目まぐるしく巡っていくのである。越中・信濃・関東も決して安定した時期ではない。各方面から援を請われても謙信自らが動くこ

とは一度もなかった。この期間、謙信にとつて極めて重要なことが行われていたものと考えられる。

謙信は天正三年四月中旬までに伝法灌頂を授けられたと考えられるが、次には、伝灯阿闍梨法印となるために、自ら灌頂壇を開いて弟子に灌頂を授け、また伝法大会という教相の論議を受けることになる。この一年余の間には、剃髪法体から四度加行、伝法灌頂、伝法大会という一連の儀式が法に従つて厳肅に執行されたのである。そして、高野山から正式に謙信が阿闍梨法印権大僧都に任ぜられたのを待つて、清胤は高野山に帰山したであろうと考えられる。ここに、清胤の越後下向二回説をとるものである。

むすび

以上のように、謙信の法体は、天正二年（一五七四）十二月の剃髪に始まり翌天正三年四月中旬に伝法灌頂を終えて、さらに伝法大会を修するものであった。これは当時流行した戦国大名の入道姿とは性格を全く異にしているものである。

謙信の死後、その遺骸は「甕内ニ納メ、平生ノ御武威ヲ不変甲冑ヲ着サシメ、不識院内ニ葬埋」された。^④序章で述べた御堂祭祀は藩政時代のものであるが、同様のことが死後直後より行われていたことは容易に察することができる。第一に、上杉氏が会津へ転封の際には、その帰依した多くの寺社を伴ったが、大乘寺、宝幢寺、妙観院（越後国分寺塔頭）のみは越後に滞つて謙信廟の守護厳重であった。そして上杉氏にかわつて春日山城へ入った堀氏はこれを嫌い、廟所の移転を催促するのである。

これによつて、慶長三年（一五九八）八月、景勝はやむなく謙信廟を会津へ移転する。それは、^④

（慶長三年）同年秋八月二日 越府春日山不識院ヨリ、謙信公尊体ヲ会津ニ移シ玉フニ付テ、春日山大乗寺、妙観院、宝幢寺ニ御書ヲ下サル（中略）御棺ヲ掘出シ、別シテ新椁ヲコシラヘ御棺ヲ入、旅行自由ナルヤウニ相計フヘシ。僧中ノ外俗人ハ曾テイロフ事堅ク制スヘシ。駅路御棺ヲカキ奉ル輩ハ健士ヲ撰ヒ、手明組ヨリ百人遣ハサル。弥以念ヲ入ヘキ仰下サル

という嚴重なものであった。

また、慶長六年の景勝の米沢転封に際して謙信廟も米沢へ移され、前述の御堂は慶長十四年（一六〇九）に完成した。翌年には謙信三十三回忌法要が営まれ、この頃には御堂祭祀も確立したと思われる。

謙信の遺骸に甲冑を着せて御堂に祀り、日夕の供饌を行ふことは、高野山で空海が生身のままで奥院廟窟に永遠に生き続ける人として四時勤仕されているのに似ている。かようにして神格化された謙信は、藩政時代には「武尊公」という最少限のことばで呼ばれ、その敬崇の念は最大限に表わされた。謙信崇拜はすなわち謙信の信念を藩主自らが実践することであり、それは上杉家ひいては米沢藩を安定させうる大きな精神的支柱となったのである。

謙信は出家遁世という本意を遂げることなく逝ったが、謙信法体の意義は景勝の御堂祭祀によって生かされることとなったのである。それは、現当主上杉隆憲氏のことば、

（謙信は）自分のなすべき第一義は何かと、死にも

の狂いで毘沙門天と対決して得た、信念と勇氣とをもつて貫いた生涯でありました。業半ばにして没しましたが、望みを達成するよりも、むしろ意義の深いものだと思います。

あるいは、

謙信公を初代にいただき鷹山公を中興の祖と仰ぎ、私としては歴史の重みを感じざるを得ません。従つて私は、いかに生きるべきかを考えなければならぬ立場に置かれた訳です。核家族化が進み家そのものが崩壊しかけている中で、尚家を守り続けてゆくのは容易なことではありません。（中略）併し私はその努力の中に喜びを見出しています。何故なら偉大な祖先を持った誇りと喜びを持ち続けたいと念願するからです。

という中によく示されているのである。

翻つて、清胤と景勝の關係にも注目される。殊に、天正十四年（一五八六）には高野山の重宝たるべき『綜芸種智院式併序』^④が清胤から景勝へ託された。それは、清胤がこれを景勝に託することによって戦火から守ろうと

したのであり、清胤の上杉家に対する期待の大なることを示すものである。その依ってくるところは、いうまでもなく謙信の清胤への深い帰依に他ならない。

註

- ① 上杉謙信は初名を景虎、後に政虎、輝虎と改め、法体して謙信という。ここでは便宜上、謙信と統一する。
- ② 大乗寺良一編『上杉神社誌』による。米沢城本丸の御堂は明治四年に仏式を改め神祭となし、上杉神社となる。
- ③ 筆者蔵、永禄七年甲子六月廿四日 上杉輝虎自筆願文複製品。越後一宮弥彦神社へ奉納されたものである。
- ④ 『浄土宗全書二〇』所収の『百万遍智恩寺誌要』は、越後高田善導寺とするが、同寺は初め直江津に建立され、慶長十八年に高田へ移転した。宍長は天文二十二年六月二十二日に智恩寺へ晋山、宮中に選撰集を講じ、同六月二十五日、智恩寺へ紫衣の永宣旨を賜った。
- ⑤ 上杉神社蔵 大徳寺徹軸授記文。
- ⑥ 高梨有興師解説『仏説毘沙門天王功德経』による。高梨師は上杉家菩提寺法音寺住持。昭和五十九年より同六十三年まで真言宗豊山派教化部長。
- ⑦ 上杉神社蔵 唐草透彫鳥帽子型兜。儀式用として使用されたと思われる。
- ⑧ 新潟県上越市の林泉寺蔵。一般に知られる「毘」の一字

の旗は隊旗である。

- ⑨ 佐藤進一他編『影印北越中世文書』所収（九九～一〇四頁）。左の三通。

（天文廿四年）正月十四日 毛利越中守宛 長尾入道 宗心書状。

（天文廿四年）二月十三日 毛利越中守宛 長尾入道 宗心書状。

天文廿四年二月三日 安田越中守宛 大熊朝秀等起請

文

また、高野山清浄心院は、年未詳神無月十一日 清浄心院宛宗心書状を蔵す。

- ⑩ 高野山無量光院の『先師過去簿』による。

⑪ 堀田真快著『高野山金剛峰寺』一九一～二〇〇頁「白袈裟から紫の衣へ」を参照。以下、清胤の僧階の考察はこれによった。

- ⑫ 米沢市立図書館蔵『歴代古案十ノ三』古案五の項、（弘治二年）六月廿八日 長慶寺衣鉢侍者禪師宛 長尾弾正少弼入道書状。

- ⑬ 上杉家古文書第九七七号（弘治二年）八月十七日 越前守（長尾政景）宛 長尾景虎書状。

- ⑭ 米沢温故会発行『上杉家御年譜』謙信公』一九七頁。

- ⑮ 井上鋭夫編『上杉史料集（上）』所収。

- ⑯ 現在、府内宝幢寺の位置を特定することはできないが、現在の越後国分寺付近と推測される。後に米沢へ移った宝

幢寺は明治五年廃寺となり、大日堂のみ現存。

⑭ 黒川真道編『越後史集人の巻』一二八頁。

⑮ ⑪に同じ。

⑯ 高梨有興「剃髪について」米沢温故会誌『温故』第二号所収。

⑰ ⑮に同じ。

⑱ 上杉家古文書第九九九号 元龜元年十二月十三日 御宝前奉納 上杉謙信自筆願文。この年は、謙信生母の三回忌、義兄長尾政景の七回忌にあたり、謙信を称した所以もうかがわれる。

⑲ 高橋義彦編『越佐史料卷五』三一〇頁。

⑳ 平野団三「吉川町大乘寺の石仏」上越郷土研究会会誌

『頸城文化』第四三号所収。平野氏は上越市文化財調査審議会委員。

㉑ ㉒に同じ。

㉒ 上杉神社宮司大乘寺健氏蔵。米沢城二の丸の大乘寺は御堂の神祭によって社家に転じる。これは明治二十六年に記されたもので、仏式の「法印」ではなく、神式の「命」となっている。

㉓ 大乘寺良一著。大乘寺健氏蔵。

㉔ ㉒に同じ四九六頁。

㉕ ㉒に同じ二一三～二四頁。

㉖ ㉒に同じ四三二頁。

㉗ 上杉家古文書第九九八号 天正三年卯月廿四日 御宝前

奉納法印大和尚不識院謙信願書案

① 高野山無量光院蔵（天正三年）六月五日 宝性院宛 宝幢寺清胤書状

② 布施秀治『上杉謙信伝』七九頁。

③ 大法輪閣『大法輪』昭五八・二号一八～二三頁 佐藤良盛「密教の基本的修行」より。

④ ③に同じ。また、読売新聞社編『空海と真言密教』四一～四九頁、松長有慶「秘儀と修法の世界」および、米沢温故会『温故』第十一号所収の高梨良興「謙信公と真言密教」より。

⑤ ④の松長有慶「秘儀と修法の世界」より。

⑥ 上杉家古文書第六四二号（天正三年）七月廿一日 謙信法印御房宛 無量光院快慶書状。快慶は無量寿院の住持であり、無量光院に住したことはない。天正十六年に寺務検校となる。統真言宗全書刊行会編『金剛峰寺諸院家析負輯』（以下「析負輯」とする）には、（八頁）

前寺務検校執行法印大和尚位快慶

仮名長任房、第二百四代検校、淡州之人也、前住隨心院、後住当院、文祿二年癸巳八月二日未剋化寂、行年七十六歳也、

とある。

⑦ 上杉家古文書第六四三号（天正三年）七月廿八日 宝幢寺宛無量光院有義書状。

⑧ 『析負輯』二七～二九頁。

③②に同じ。三〇九頁。また、『析負辨』六三六頁には、
清浄心院累代先師

伝灯大阿闍梨快宣

当院開基以来三十五世、文禄五年丙申六月廿九日入
寂、春秋五十九、

〔傍註〕天正十九年之僧名牒云、快宣淳音房清浄心院、
已灌頂、

とある。なお、上杉家古文書第六四四号に、年末詳十二月
廿一日謙信法印御房宛僧快宣書状がある。この日付の「暮
律」は三月であり、宛名を謙信の法体を認めた「謙信法
印」としていること、さらに直江大和守（景綱・天正五
年三月五日没）を介していることからみて、年代は天正四
年と特定しうるものである。

④③ ④④に同じ。四五五～四五六頁。

④① 謙信が弟子に灌頂を授けた記録はないが、高野山龍光院
の弁雄は上杉家家臣北条安芸守の子であり、初めは宝幢寺
に住している。しかし宝幢寺は清胤の兼帯寺院であり弁雄
が住持であったとは思われない。当時、弁雄三十七歳であ
り、後に高野山に登り北室院頼旻より伝法されているの
で、この時に謙信によって受明灌頂を授けられたとしても
矛盾はない。（『析負辨』一五三頁参照）

④② 法音寺の位牌は「不識院殿法印権大僧都謙信 不生位」
となっている。

④③ ④④に同じ。四九六頁。

上杉謙信の法体について

④④ 『上杉家御年譜3 景勝公②』一五三～一五四頁。

④⑤ 上杉神社刊『上杉神社権照殿の宝物』の序文より。

④⑥ 昭和五十二年四月二十九日、謙信四百年遠忌法要におけ
るあいさつより。（米沢温故会の記録より）

④⑦ 上杉神社蔵 重要文化財 弘法大師空海の真筆とされ
る。

伝来の詳細については後日に譲ることとするが、本願寺
が滅ぼされ、比叡山・根来寺が焼討ちにあい、その戦火が
高野山に及ぼうとする時、重宝を救うためには、上洛して
その勢力の揺ぎないものとなった景勝にその行く末を託す
他はないという、清胤の上杉家への期待と解釈したい。

参考文献

一、史料

「天正三年」六月五日 宝性院宛 宝幢寺清胤書状「高野
山無量光院蔵（軸装）」

『先師過去簿』同右蔵

『上杉家古書簡』高野山清浄心院蔵（軸装）

「天文廿二年臘八日 前大徳徹岫宗九授記文」上杉神社蔵
（軸装）

「大乘寺家代々御靈号記」大乘寺健蔵（軸装）

「永禄七年六月廿四日 弥彦神社奉納 上杉輝虎自筆願文複
製品」筆者蔵（額装）

『上杉家古文書』大日本古文书家わけ十二 東京大学史料編

纂所編

『上杉家御年譜』卷一～卷三 米沢温故会刊 昭和五十一年
 『金剛峰寺諸院家析負輯』統真言宗全書刊行会編 昭和五十三年

『越佐史料』高橋義彦編 名著出版複製版 昭和四十六年
 『影印北越中世文書』佐藤進一他編 柏書房 昭和五十一年
 『上杉史料集』井上鋭夫編 人物往来社 昭和四十一年
 『越後史集』黒川真道編 越後史集刊行会 大正六年
 『歴代古案』米沢市立図書館蔵
 『浄土宗全書』浄土宗典刊行会編 昭和四十九年

二、著 書

『高野山金剛峰寺』堀田真快著 学生社 昭和四十七年
 『上杉神社誌』大乗寺良一著 上杉神社社務所 昭和五年
 『大乗寺家記』同右 自費出版 昭和三十年
 『上杉謙信伝』布施秀治著 歴史図書社複製版 昭和四十三年

三、論文等

『随想 剃髪について』高梨有興 米沢温故会会誌『温故』
 第二号 昭和五十年
 『謙信公と真言密教』高梨良興 同右第十一号 昭和五十九年

年

『吉川町大乗寺の石仏』平野団三 上越郷土研究会会誌『頸城文化』第四十三号 昭和六十年
 『密教の基本的修行』佐藤良盛 大法輪閣『大法輪』昭和五十八年・二号
 『灌頂とは何か』同右

『秘儀と修法の世界』松長有慶 読売新聞社刊『空海と真言密教』昭和五十四年
 『上杉神社稽照殿の宝物』上杉神社刊 昭和四十四年

資料提供協力者（順不同・敬称略）

土生川正道 高野山無量光院住職
 平尾 光澄 高野山清浄心院
 高梨 有興 米沢法音寺住職
 高梨 良興 同右副住職
 大乗寺 健 上杉神社宮司
 渡部 恵吉 米沢市文化財調査審議会委員
 中澤 肇 上越市文化財調査審議会委員
 笹川 元祥 越後林泉寺住職